もうひとつの長征

――大後方への旅（五）

楠原俊代

二

長沙が初めて日本軍機による爆撃をうけたのは一一月二四日で、それは長沙臨大で授業が始まってから三週間あまりがたち、南岳分校での授業が始まってからわずか五日後のことであった。中国側の資料『湖南近百年大事紀述』[1]によれば、この日、敵機四機が来襲し、小呉門および長沙駅一帯に六個の爆弾を投下、三〇〇人余の死傷者が出たという。

第一回目の長沙空襲のもようについては、危うく命をおとすほどの恐怖の体験をした蔡孝敏の回想録[2]のなかにみることができる。

――一九三七年一一月二三日のこと、わたしは昼食をすませた後、（臨大宿舎の）四十九標に行こうと瀏陽橋から人力車を雇ったのだった。ところが車に乗ってまもなく長沙駅付近を通り過ぎたとき、とつぜん閃光に目がくらみ鼓膜に痛みがはしり、旋風がおこって身体ごと人力車のしたに捲きこまれてしまったのである。車夫の姿はどこにも見あたらず、わたしにはいったい何がおこったのか皆目わからない。通りの真ん中には誰もおらず、両側の歩道では商店や民家をめがけて人波が押しよせ、わたしもまた無意識のうちに、とある一軒の店へ飛びこみ地べたに身を伏せると同時に、誰かがわたしの背中の上に倒れこんできた。

次第に平静をとりもどすと、飛行機の爆音が近くまた遠くから聞こえてきた。そこではじめてわたしは敵機が長沙上空に侵入して爆弾を投下し、わが無辜の軍民同胞を惨殺したのだということが分かったのである。半時間後に警報が解除になると、みなは地面から起きあがり、たがいの無事を喜びあったが、店を出てみれば、街は見るも無惨な光景となりはてていた。爆死した同胞は白い布で覆われ、手足を失った多くの人々がいたるところで呻き声をあげ、救護人が応急処置を施していた。

すると、とつぜんひとりの老婆が言葉もあらあらしく険しい顔付きでわたしを指さし、「みんなお前たちが爆弾を運んできたんだ」と叫んだ。わたしの制服はカーキ色だったので、老婆はわたしを中央の軍隊と間違えたのであろう。老婆の身内に死傷者がでたショックでわたしに八つ当りしているにちがいない。わたしはそう思って、日本軍閥への激しい憎悪をさらに深めながら黙ってその場をたち去ったのだった。

それにしても、この日は空襲警報も緊急警報も鳴らなかった。敵機来襲を発見することもできず、内陸部の長沙にまで飛来させてしまうとは、まったくお粗末な話だ。われわれの防空哨戒体制がこんなものだとは思いもし

なかった。

けれどもこうした人命軽視の大失策がまたわたしの命を救ってくれたのでもあった。というのは、空襲警報が出れば、わたしはいつも長沙駅前の公共防空壕に避難していたのである。この日は駅前の防空壕が不幸にも真っ先にやられ、避難していた人々は全滅した。もしもこの日警報が出ていれば、わたしもそこへ避難して間違いなく死亡していたはずである。わたしが助かったのはいったい誰に感謝すべきなのか、四〇年たった今もまだその答えを出せないでいる。

蔡孝敏は、この日のことは郷里の天津を出てからちょうどまる二カ月後にあたっていたため、とりわけはっきりと記憶しているのだという。

趙元任夫人の楊歩偉も、また、このときの長沙空襲について書きのこしている。[3] 趙元任一家が南京から長沙に避難してきたのは一九三七年八月。その後まもなく南京のかれらの家が日本軍機の爆撃で全焼したことを聞く。趙元任は失った家産のことなど気にもかけなかったが、このとき焼失してしまった書籍のことだけは惜しんで、眠られぬ夜を過ごしたという。長沙で平安に過ごせたのはわずか三カ月余で、日本軍機は長沙にまで執拗に追いかけてきたのであった。

楊歩偉の回想によれば、日本軍機は南京でと同じように機上の人の顔まで見えるほどの低空飛行をすることもあったが、初めの二回は爆撃をくわえず、警報が鳴っただけであった。けれども一一月二四日には、ほんとうに爆弾が投下され、長沙駅がやられて多くの負傷者がでたという。そして楊歩偉は次のようにつづけている。

――一時間後に湘雅医院から負傷者の救助に同道するようにとの電話がかかってきた。長沙到着後、紅十字会（赤十字社）にはいって活動していたのである。

駅に行ってみるとそれこそ目茶苦茶に混乱していて、医薬品はなし、負傷者の収容先もなしで、その場に寝かせておくよりほかはなかった。駅は場所としてはまだ広かったからよかったようなものであったが。

そのほか駅近くの礼堂（講堂）では結婚式の最中に爆撃を受け、新郎は助かったものの、新婦は美しい刺繍のほどこされた花嫁の靴をはいたままの足一本だけをのこして吹き飛ばされてしまったということだった。わたしは急いでそこへ駆けつけたが、もう片付いたあとで、わたしにできることはなにもなかったので帰宅した。

そこへ長女と三女も頭からほこりだらけになってもどってきた。ふたりは学校から軍隊の慰問に出かけるとちゅう日本軍機に遭遇したのだが、近くの小さな店に避難して無事だったという。

そのほかに浦薛鳳の前掲文によれば、この日はそれまで降りつづいていた雨がやんで、久しぶりの晴天であった。浦薛鳳は、昼食のあと顔を洗って自室で休もうとしていたところ、李継侗らにさそわれてブリッジをしていると、いきなり階下付近で大きな音がし、つづいてまたドーンという音とともに全館が揺れ動いた。空襲だと思ったかれらは地下室に逃げようとしたが、日本軍機がすぐ近くに迫っているような気がして、一階の食堂でうろうろしていると、またつづけて二度爆撃音がしたためあわてて机のしたに隠れた。警報は日本軍機が飛び去ってしまってから鳴った。

浦薛鳳の部屋は窓ガラスが粉々に割れ、破片が部屋中に散らばっていた。もしも部屋で休んでいたなら、あるいは

いつものようにかれの部屋でブリッジをしていたら、負傷するところであった――このブリッジについて浦薛鳳は、国難のときに逸楽をむさぼっていたのではなく、こうして悩みや憂いをまぎらわしていたのだと記している。

あとで知ったところによると、長沙駅の軌道の両側に大きな穴が六、七個あいたが、この付近はちょうど空き地だったので、被害はわりあいに少なかった。しかし軌道の向こう側は人家の密集区域で百名を越える死傷者がでた。またある旅館ではちょうど結婚式の最中で、新郎新婦から親兄弟、親戚、友人にいたるまで列席していたものは、ひとりとして難を免れたものがいなかったという。

その後、なぜ警報が鳴らなかったのかについては、避難する市民に道を塞がれて要人たちの自動車が通れなくなっては困るからだというものもあれば、張治中が省政府の新主席に着任ということで示威に来たのだ、新旧の引き継ぎ時で無責任な状態だったのだというものなど、諸説紛紛であった。いずれにしても、浦薛鳳は、警報も鳴らずに初めての爆弾投下をうけるとは思いもしなかったと述べている。長沙に到着するとすぐに警報はこれまでに出たことはあっても、敵機はまだ飛来していないと聞いていたのである。

当時の戦況をここで一瞥しておこう。

日本軍は華北方面では河北省境（平津・冀東）を拠点とし、北に綏遠・チャハルを窺い、西には山西を攻め、南は豫北（河南省北部）、東は山東へと侵攻をすすめていた。平漢線に沿って南下した日本軍は一〇月一〇日石家荘を占領、一七、一八日には邯鄲、磁県が、そして一一月五日には河南省の安陽まで陥落した。津浦線方面では一〇月五日山東省西北端の徳州まで占領、また山西省を縦貫する同蒲線沿いでは九月には大同、一一月八日には太原を占領、綏遠省方面では一〇月一六日包頭にまで達した。こうして日本軍は、一〇月中にほぼ河北・チャハル・綏遠・山西の各

省の要地を占領し、さらに山東・河南省にむかって前進をつづけ、戦線は拡大の一途をたどっていた。

これに反し、上海方面では中国軍の抵抗がつよく戦線は膠着。そこで一〇月二〇日杭州湾北岸に上陸命令がくだされ、一一月五日日本軍は杭州湾に上陸すると、ただちに黄浦江にむけて進軍。背後を脅かされた中国軍は一一月九日から転進を開始、上海は同月一二日に陥落した。

『戦史叢書・支那事変陸軍作戦〈一〉』によれば、日本軍は八月から一一月八日までの三カ月たらずの間に、上海方面だけで四万人をこえる戦死傷者をだした。[4] 一方、『抗日戦争紀事』によれば、この淞滬戦役で（淞滬とは呉淞・上海のこと）日本軍は二二万余人の兵力を投入、戦死傷者は五万余人、中国軍側は七〇余万人を投入、戦死傷者は二五万人以上に達したという。[5]

その後、華中方面での戦線もまた急速に展開、楓涇、嘉善、平湖、そして呉興、長興、宜興もおち、一一月一六日日本軍は常熟近郊にまで迫り、二一日には常熟、呉県（蘇州）、二七日には無錫が陥落した[6]——嘉善といえば費自圻の、常熟は浦薛鳳の郷里であった。また、このときの楓涇、嘉善への侵攻は日本軍下士官として杭州湾上陸作戦に参加した火野葦平の『土と兵隊——杭州湾敵前上陸記』（一九三八年『文藝春秋』一一月号）に詳しい。

こうした状況のもとで、北大・清華・南開三大学の移転はすすめられていたのである。

浦薛鳳の前掲文によれば、長沙には北京とちがって英字新聞がなくロイター通信の記事を読むことができず、はなはだ苦痛であったという。やむなくラジオを聞いたが、香港と上海大晩報からの英語放送がはいり、その日のうちにロイターのニュースを聞くことはできた。それでも戦況については、口コミによる情報がほとんどであったもようである。

浦薛鳳の郷里、常熟の陥落は一一月二一日であるが、かれは常熟がいつ陥落したのかはっきりとは分からない、新聞に掲載された日付は事実とは若干のズレがあり、だいたい同月一二日から一四日のあいだではないかと書いている。

この常熟陥落についても諸説紛紛で、常熟城の内外はそれほど破壊されなかったかもしれない、中国軍は激戦することなく総崩れとなって退却したというものもあれば、激しい爆撃のため城内は灰燼に帰したというものもあった。長沙に到着後、両親からは一一月一日と九日付の二通の手紙が届いたが、同時に送られたという小包は届かない。両親からの手紙によれば、一〇月一二日、城内は日本軍機の爆撃をうけ、両親と家は無事であったけれども、近隣の多くの家々は瓦礫と化したという。そして、それ以後の音信は途絶えたままである。

北平を発つ前、かれは両親に手紙を出すたびに宜興の張渚鎮へ避難するようにと勧めていた。張渚は山中にあり、戦場となることはあるまいと考えたのである。万一不幸にして敵軍が進攻してくれば、じっとして動かず、天命に任せるよう、また避難するなら早く避難すること、危険が迫ってからは動かないようにとも述べていた。

そうはいっても、初めは常熟が落ちるとは思いもしなかった。それが宜興、溧陽まで陥落。蘇州、宜興一帯では、中国軍は戦わずして崩れたとも、蘇州河から撤退する際には大砲もほうり出したままで、橋をみずから破壊してしまうよりほかなかったとも聞いている。

授業開始の日は間近に迫り、交通手段は寸断され、しかも両親が故郷を離れることに必ずしも同意するとはかぎらないなどと躊躇しているうちに、両親を迎えにも行けず、ついに郷里は敵の手に落ち、その消息さえ分からず、ただ無事を祈るばかりであった。

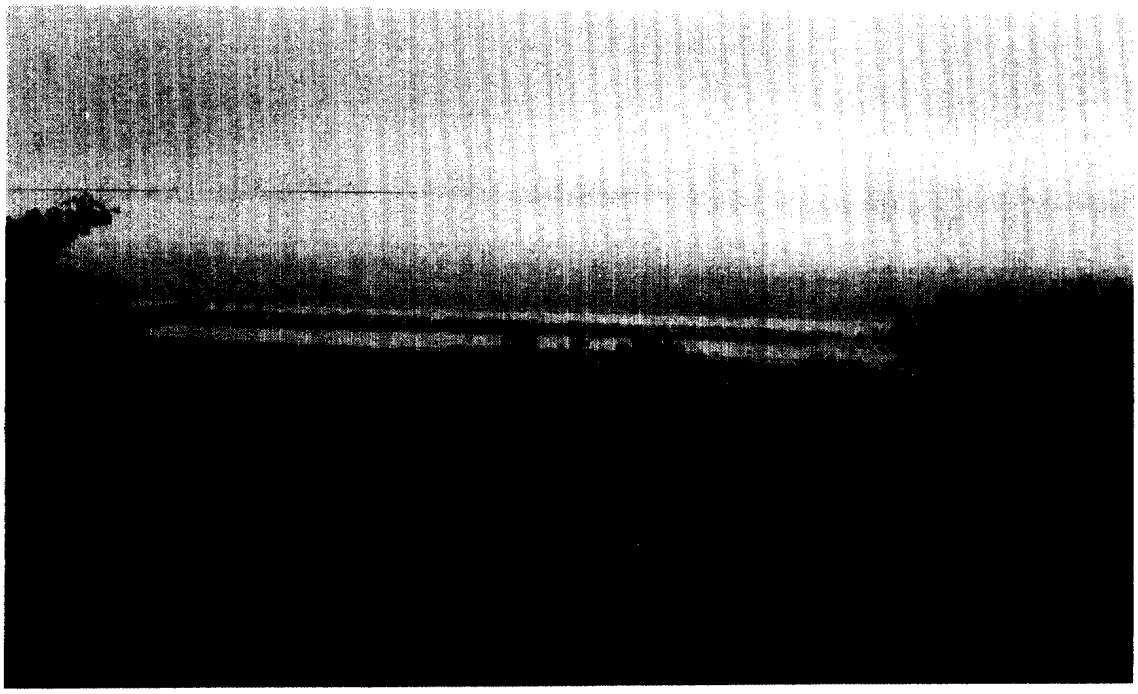
妻子や親兄弟は各地に離散し、通信も途絶えがちになり、郷里は敵の手に落ちて、浦薛鳳は、このときの不安な気

湘江の流れ

1972年9月に長沙市街と橘子洲、岳麓山をむすぶ湘江大橋が完成。
右岸は長沙側、左岸は橘子洲。
（1981年9月末撮影。以下、長沙の写真は同じ時に撮影）

持ちはなんとも表現しがたいものであったと記している。そしてそれはかれのみならず、おおかたの教授、学生たちの気持ちでもあり、そうしたなかで臨大の授業は始まったのであった。

長沙は折しも秋たけなわで、菊花は咲きほこり、全山が紅葉した。浦薛鳳は、臨大の同僚としばしば湘江を渡って岳麓山にも遊んだ。秋空に映える岳麓山の紅葉は北平西郊の玉泉山一帯にも劣ることなく、そこに遊ぶたびに万感胸に迫るものがあった。こうして出かけるのは気晴らしのためでもあったが、空襲からの避難も兼ねていたのである。湖南大学は今もその場所にあるように岳麓山と湘江にはさまれ、街中の雑踏から少しばかりへだたった岳麓書院にあった。そのすぐ近くには麓山寺碑や杜牧の詩句「車を停めて坐に愛す　楓林の晩、霜葉は二月の花よりも紅なり」（「山行」）によって命名された愛晩亭があったし、少し山を登れば湖南の生んだ清末民国初の革命家黄興と蔡鍔の墓もあった。湖南大学で学んでいた雲鎮もまた警報が鳴る



岳麓山頂上から湘江と長沙市をのぞむ

湘江の中の砂洲は橘子洲

たびにこうした名勝古蹟へと逃げこみ、腰をおろせば市中を空襲する敵機の動きをはっきりと見ることができたと記している。

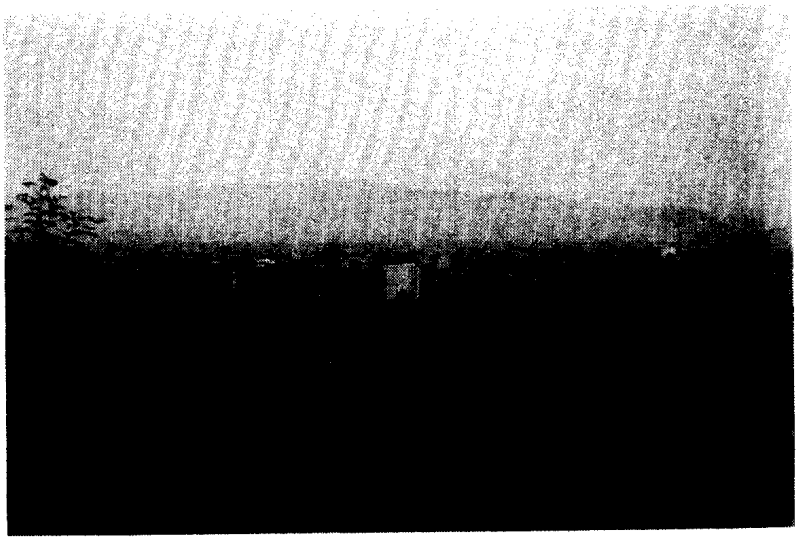
長沙で一番高い建物は長沙城壁の東南隅にある天心閣で、そこからは長沙市街が一望にでき、ゆったりと北に流れる湘江となだらかな岳麓山の姿に、胸のつかえの晴れる思いがした。浦薛鳳はここにも友人と数回遊んだのだった。

ある日の夕方、浦薛鳳はひとりで天心閣に登り、詩心のおもむくままに、

独到天心望日落　独り天心に到りて　日落つるを望む
何時漢月照清華　何れの時か　漢月　清華を照らさん

の二句を口ずさんだこともあった。天心閣に登っては北平西郊の頤和園万寿山の龍王廟が、美しい夕焼けのうろこ雲を見ては清華の夜景が思われたのである。

湘潭に避難している友人を訪ねて同地に遊んだこともあっ



天心閣からみた長沙旧市街

湘江をはさんで前方にみえるのは岳麓山

た。しかし菊花が美しく咲きほこっていても愛でる気にはならず、ふかまりゆく長沙の秋がどんなに素晴らしくても、家のことばかりが思われて、ひとりで長沙にいるのは、このうえもなく苦痛だったのである。

一二

先にも述べたように、一一月二〇日の時点で長沙臨大の学生総数は一、四五二名、教員数は一四八名。大勢の教授、学生が長沙に到着し、臨大の授業はようやく軌道にのりだしていたのであった。

浦薛鳳は一週間に授業を五時間持った。これは北平の清華大学にいたときと同じであるが、二、三時間しか持たないものもあった。浦薛鳳によれば、授業は秩序正しくおこなわれ、かれの「政治学概論」のクラスの受講生は約一二〇名で、教室が狭く、初めは立って聴講するものもあったが、学生たちはみな真剣にノートをとり、清華での授業風景とまるで同じであった。

南岳分校の柳無忌が担当したのは英国文学史（受講生一四名）と英国戯曲（受講生三〇余名、多すぎるようだが日記によるという）、英国現代文学の三科目であった。柳無忌によれば、この三科目については南開大学でも教えて

いたが、慌ただしく長沙にむけて出発したため書籍はもちろん、ノートの類までなに一つ持参してはいなかったという――蘆溝橋事変が勃発したときにはもう夏期休暇にはいっていたため妻子とともに上海の両親の家で過ごしていた。天津のかれの住居はすでに日本軍に占領され、ある日、突然、臨大開設の通知を受けとり、かれもまた戦火の中に父母と妻、生後一カ月にも満たない娘を残したまま単身で長沙にむかったのであった。

幸い、かれは当時はまだ若くて記憶力にも優れ、『ケンブリッジ版英国文学史』や『金庫詩選』(*The Golden Treasury of Songs and Lyrics*)、何冊かのエリザベス朝時代の戯曲集をなんとか手にいれて授業をした。学生たちの勉強も容易ではなく、教科書がないばかりか参考書も足りず、教室の小さな黒板さえ後になってようやくはいったのであった。試験の成績はノートを丸暗記したためか似たようなものであったが、こんな状況のもとでは非難することもできないだろうという。

しかしそれも長くはつづかず、一一月二四日の長沙空襲以後、落ち着いて授業ができるような状況ではなくなった。この日以来つづけて何回も警報が鳴るようになり、日本軍機は頻繁に長沙にも爆撃をくわえるようになったのである。浦薛鳳の回想録によれば、二五、二六、二七、二八日と四日連続して警報がでて、そのたびに聖経書院地下室に避難し、不安な時を過ごした。そしてこの初めての長沙空襲以来、一般に長沙を去るものは去り、来ていないものは来るのをやめてしまい、秩序は保たれていたが、精神面ではそれまでとは格段の差が生じた。図書館でも当初は真剣に書籍雑誌の購入を考えていたのが、そうした積極的な措置は完全に停止されてしまったという。

前章でも記したように、当時、戦線は急速に拡大し、中国軍は敗走をかさねて首都南京にまで危険が迫るにおよんで、国民政府は一一月二〇日ついに重慶遷都を宣布。一二月一日、大本営は南京攻略を命令、一二月一三日には南京

が陥落。さらに日本軍は進攻の勢いを止めようとはせずに、一二月一五日には江蘇省揚州と安徽省蕪湖を、一二月二四日には浙江省杭州を占領、そればかりか山東省でも津浦線沿線では一二月二七日済南、翌年の一月一一日済寧を、また一月一〇日には青島を占領した。

大部分の学生たちの郷里は日本軍によって占領されたり、あるいは戦場となって、家からの手紙も届かなければ、両親の安否のほども分からない、仕送りも途絶えてしまうという事態にまでなった。家を失い国都が陥落し、長沙も毎日空襲の危険にさらされるようになって、臨大はふかい哀しみと憤り、不安につつまれた。そこで多くの学生たちはもはやこれ以上勉学をつづけていくことはできない、「国家の興亡は、匹夫に責あり」と決意し、あるものは軍隊にはいって前線に赴き、あるものは延安の抗大[7]まで行き、また戦地服務前団に参加するものもあった。[8]

この時期の臨大について、『南開大学校史』[9]には次のように記されてある。

「一二月一三日、国民政府の首都南京が陥落し、三四万[10]の軍民が日本軍によって惨殺された。怒れる愛国青年たちはもはや二度と教室のなかで机を前に静かに座っていることはできなかった。

中国共産党は、時を移さず愛国青年たちの進むべき方向を指し示した。

一二月三一日、周恩来は武漢で大学生たちに『現段階における青年運動の性質と任務』の講演をおこない、現段階における青年運動は民族を滅亡の危機から救わなければならない、救国という重大な任務をまっとうしなければならない、このために青年たちは軍隊や農村、戦地に行き、民衆を発動し、民衆を組織し、抗戦の最後の勝利を勝ち取らなければならない、とはっきりと指摘した。

共産党員徐特立もまた長沙臨時大学で講演し、民衆を動員し、参軍参戦しよう、と呼びかけた。こうして臨大校内には『前線へ行こう！』『従軍しよう！』といった抗日救国の声が響きわたり、広汎な学生たちを激励した。学校は学生たちの要求を支持し、常務委員会は『国防にかかわる機関に服務しようとするものは、すべて学籍保留の申請をすることができる。また服務先機関は、学校の紹介を受けることができる』と決定した。

多くの学生たちは続々と申請を出し、湘江また白龍潭のほとりでは、歓送会が次から次へと何度もひらかれ、残るものと出発して行くものたちは別れにのぞんで互いに励ましあった。愛国青年たちは一団また一団となって学校から去っていき、臨大に学生は一、〇〇〇人しか残っていないという時期もあった」

ただし、前記にいう「国防にかかわる機関に服務しようとするものは……」の布告が学生に出されたのは、一二月一〇日で、南京陥落よりも以前のことである。また同日、国防服務紹介委員会および国防技術服務委員会の委員も決まっている。[11]

周恩来の講演は武漢大学における共産党地下支部の外郭団体、抗戦問題研究会の招請でおこなわれた。重慶遷都、南京陥落の後は、武漢が国民党統治地区の政治・軍事・文化の実際上の中心地となった。延安の中共中央は一二月、武漢に中共中央長江局を置き、対外的には中共中央代表団と称した。周恩来は当時その副書記として、王明（書記）、博古、葉剣英、董必武等とともに武漢に赴任していた。

それと前後して中共中央は西安、南京、武漢、長沙、迪化（ディホウ）（今の烏魯木斉（ウルムチ））、広州等に八路軍弁事処あるいは通訊処を開設。一九三八年一月一一日には漢口で『新華日報』を創刊。『新華日報』とは、国民党統治区において公開

出版された中共機関紙である。また八路軍とは「国民革命軍第八路軍」の略称で、抗日戦争中、中国共産党が指導した人民軍。抗日民族統一戦線の成立により中国労農紅軍の主力部隊を改編したもので、一九三七年九月、さらに国民革命軍第十八集団軍と改称された。

徐特立もまた一九三七年一二月九日、国民革命軍第十八集団軍高級参議および駐湘代表として長沙に赴任、八路軍駐湘通訊処（後に弁事処）を開設。かれの主要な任務は統一戦線工作、すなわち各界の愛国人士に抗日戦争への参加を呼びかけ、大衆を動員して物資を募り、抗日戦争を支援することであったが、それと同時に、秘かに共産党組織を回復、発展させるための条件作りもかねていた。かれは長沙銀宮電影院（映画館）や第一師範等で、国内外の情勢および共産党の抗日の主張について、招かれて何度も講演したというから、臨大での講演もそのような活動の一環としてなされたものであろう。

日中戦争勃発にともない北平・天津・上海・南京一帯の文化教育機関や工場は続々と奥地への移転をすすめていた。共産党地下組織はこうした新たな状勢に対応し抗日工作を継続すべく、各単位の党員に所属機関の奥地への移転に従うよう呼びかけていた。こうして一九三七年七月下旬には長沙にもどった学生たちが平津各大学留湘同学会を組織、同月中旬に結成された湖南省政府の御用組織である長沙抗敵後援会にも参加して湖南人民抗敵後援会に改組した。その後も共産党の指導のもとに、抗日宣伝および組織工作がどんどんと進められ、八月には湖南婦女抗敵後援会、九月湖南学生抗敵後援会、一〇月湖南文化界抗敵後援会が組織され、長沙市のみならず岳陽・衡山・南県・益陽等の県でも多くの抗敵工作団や抗敵宣伝団といった組織がうまれた。長沙臨大でも一〇月北大、清華の学生共産党員十余名からなる党支部が結成されている。こうしたなかで八路軍駐湘通訊処が開設され、一二月一九日には中蘇文化協会湖南

分会が成立、機関誌の『中蘇』半月刊も創刊され、マルクス主義と全面抗戦の宣伝、および蘇聯（ソ連）における社会主義革命と社会主義建設の紹介がなされた。その他には『火線下』三日刊、『前進』週刊、『民族呼声』旬刊、『大衆日報』等の新聞雑誌が長沙市の共産党員の手によって相次いで創刊された。[12]

また先の『南開大学校史』には、臨大に学生が一、〇〇〇人しか残っていない時期もあったというが、『清華大学校史稿』には、次のように記述されている。[13]

「若干の進歩的な学生は国民党の封鎖を突破し、山西省臨汾へ行って八路軍に参加するものや、延安の抗大に入学するものもあった」

「国民党の中央軍や胡宗南の第七預備師炮兵学校等の単位が来校し、学生を募集。一九三八年春には、もと清華大学工学院電機系・機械系の三、四年生、二〇余人全員が徴用をうけ、国民党の交通輜重学校に入学させられた。このため臨大が昆明に移転するときには、臨大学生は一、五〇〇余人から六〇〇人にまで減少していた」

臨大にとどまっていた学生の数が一、〇〇〇人と六〇〇人とでは大きな違いである。不完全な統計だというが、南開大学の学生で前線に赴いたもの、政府の軍事学校や部隊、あるいは八路軍根拠地へ行ったものは約七〇余人との記録[14]もある。かなりの数の学生が学校から去っていったことはたしかであるが、学生数の変動がそれだけ激しかったのであろう。

聞一多も次のように語っている――学生については、わたしの印象ではつねに変動があり、臨大から去っていった

学生の大多数は前線へ行き実際の戦争に参加した。そのような学生はしょっちゅうあり、それは新たにやって来た学生よりも少なくはけっしてなかった。けれども臨大にとどまった学生たちの多くはやはり学業に専念した（「八年的回憶與感想」）。

そして八路軍に参加したり、延安の抗大へ入学した学生の数は、先に引用した記録にも記すように若干名であったと考えられる。

臨大から去っていったのは主として三、四年生の、とくに工学院の学生が多かったもようである。ここで、かれらの回想録から当時の学生たちの行動について見てみよう。

工学院電機系一〇級[15]、とうじ四年生の張去疑によれば、みなで発起してクラス全員が従軍した。たとえば四年生では機械系と航空組の全員が空軍学校（原文は「空軍機校・空軍航校」）に、電機系とその他の各系が一緒になって空軍電訊班にはいった。装甲兵団や化学兵団にはいったクラスもあった。あたかも新入生が専攻を選ぶように従軍先を決め、かれもまた仲のよい友人たちとともに空軍電気士班にはいった。空軍の電訊方面に進んだ学生は約一二人であった。[16]

同じく工学院一〇級の陳乃能の回想によれば、学生たちの大部分が陸軍と空軍に参加し、少数のものが延安まで北上し抗日大学にはいったと記憶しているという。かれもまた、ただちに級友および一一級の三年生等とともに金井陸軍機械化学校に赴き八カ月間の訓練をうけた後、正式に陸軍機械化部隊に参加した。[17]

文学院中国文学系一一級、とうじ三年生の張卜庥の場合は、初めはしっかりと勉学に励もうと、臨大の図書館よりも多いほどの「説文」関係の書籍をもって衡山にのぼったのだったが、戦況が悪化、故郷にも危険が迫ったため、母親を迎えに急いで帰郷。それから一年におよぶ避難生活を送る。この間、戦時工作団に参加し、演劇や唱歌、宣伝

工作に従事し少なからぬ地方をまわる。一九三八年末には故郷付近の太行山でゲリラ戦をやり、「共匪」と競争するように日本軍と戦ったという。[18]

一一級の林徴祁は一九三七年一一月、中央陸軍軍官学校に入学。[19]

政治系一一級の周應霖もまた中央軍校第四分校に入学しようと臨大に休学届けをだして郷里の広州にもどる。ところが郷里では弟がすでに空軍学校に合格しており、父親から二人しかいない息子なのだから一人は戦場に行かないで欲しいといわれ、すぐに復学したのだという。そのかれも聯大卒業後、一九四〇年秋、四川省成都の中央軍校本校に入学。とうじ大学卒業後、軍校に入るものは多く、かれの所属した砲兵第二隊だけで一八人もいた。かれは一九四三年二月軍校を卒業の後、従軍。なお、かれの弟は一九四一年に戦死している。[20]

その他に、経済系一一級の洪同は第一軍従軍（原文は「随軍」）服務団の副団長となり軍隊とともに西北を転々として戦地服務工作に従事した。第一軍従軍服務団とは、協和医学院で看護婦の勉強をしたことのある湖南省籍の李芳蘭が、日中戦争勃発後、前線に赴き負傷者の救護にあたるべく医師・看護婦を集めて作った湖南青年戦地服務団に、長沙臨大の学生が加わり拡大改組した団体で、団長は李芳蘭――洪同は二年遅れて一九四〇年に卒業、一九五二年から台湾清華大学総務長、訓導長、教授。李芳蘭は一九七八年の時点でアメリカ在住。[21]

以上はすべて、清華大学の学生について述べたものであるが、柳無忌によれば、南開大学の学生のなかにも前線へ赴いたものが多くいた。「将来は太行山一帯に行き、ゲリラ戦を起こすかもしれない」といって学校から去っていった学生もあったという。また男子学生のみならず、女子学生のなかにも戦時工作に従事しようとしたものがあった。浦薛鳳と同郷の清華大学地学系の女子学生陳樹仁もそのひとりであった。

柳無忌は、とうじ長沙は南岳ほど落ち着いてはおらず、教授学生とも臨大から去っていくものがあったというが、南岳にも張卜庥のような学生がいたことは先に見たとおりである。新聞も二、三日おくれでしか見られないような南岳山中にあっても、長沙が初めて爆撃を受けたその日の夕食時には、もうこのニュースが伝わり、みなは不安にかられたのだった。授業が始まってからわずか五日後のこの日の南岳の天候は、「曇、晴、風、雹。近くの山の峰々は雪におおわれ、見渡す限り白色で、もう冬の到来だ」と、柳無忌の『南岳日記』には記されてあるという。そして、初めての長沙爆撃の日からちょうど五〇年後のこの日に、アメリカ在住の柳無忌はこの回想録「南岳山中的臨大文学院」を書いたのだという。

柳無忌と同じく、とうじ南岳分校にあった聞一多も一二月二六日付両親宛手紙に「当地での授業状況は尋常ではなく、教員が休暇をとって行ったまま数週間になるというようなこともよくある」、また同月妻宛の手紙には、「長沙にもどってから、戦況がさほど緊迫していなければ一度郷里に帰る。休暇をとる同僚はすこぶる多く、いま一、二週間の休暇をとっても問題はない。授業は二科目を担当、受講生はたいへん多く、南岳では最大のクラスのようで、わたしも身を入れて講義している。しかし、残念なことに大勢が定まらず、学生たちは落ち着いて受講することができないでいる」と書いている。

南岳分校に学んでいた傅幼侠も、まだ学校に到着していない教授も多くおり、参考書も不足していたため、四年生は卒業論文が免除された。かれの場合、毎週八時間の必修科目に出席しさえすれば卒業でき、たいそう暇であったという。

要するに、南岳における状況もまた聞一多の記すように尋常ではなく、不安と緊張におおわれ、とても授業どころ

ではなくなってしまったのであった。そして、そうはいっても戦地工作に従事するのでもなければ、たいしたことはできもせず、むしろたいそう暇だというような事態が生じていたのであった。長沙ではそうした事態がもっとはなはだしかったといえるのであろう。たとえば長沙では清華大学数学系の鄭之蕃教授が夫人の病気のためもあり、大勢で組んで四、四〇〇元もだして飛行機を借りきって――鄭一家の負担金は一、〇〇〇元、一二月末にやっとのことで長沙から避難していくというようなこともあったのである。[22]

学生たちの生活の面でも、先にも見たとおり、多くの学生の郷里が日本軍によって占領され仕送りも途絶えて、すでに十分に切り詰められていた生活をさらに切り詰めなければならなくなった。魚米之里、長沙の食事を楽しんでいた学生たちも、わずかのうちに懐具合いはどんどんと苦しくなり、物価もじょじょに上がって、食事も料理屋などではとてもできなくなり、屋台店で肉や魚なしですまさなければならなくなった。こうしたなかで、従軍するものや、帰郷するものがほとんど毎日のように学校から去っていき、不安定な状況のもとで、学校にとどまった学生たちの心もはげしく揺れ動いていたのである。[23]

一三

一一月二四日以来、長沙爆撃は日を追うごとに激しくなり、落ち着いて授業ができるような状況ではなくなってしまった。一一月一二日に上海が陥落すると、わずか一カ月でその西方三〇〇キロの地点にある首都南京までおち、

戦争はひましに拡大、時局はますます緊迫の度をつよめていった。一二月一三日の南京陥落の後、日本軍はさらに揚子江にそって侵攻をすすめ、粤漢路は毎日のように爆撃をうけ、武漢そして長沙にまで危険がせまったのである。

長沙臨大をどうするかということは、当時において、重要な問題であった。臨大を継続させていく唯一の方法は戦区から遠くかけ離れた場所に移転するしかなく、そのまま坐して死を待つわけにはいかなかった。

そこで学校では再度の移転が議論されることとなった。いったいいつまで学校を続けていけるのか、教職員、学生のだれもが学校の前途に憂慮をいだき、南岳にもさまざまな噂が伝わってきた。

しかし当時は民情が大きな圧力となって臨大移転など言いだせるような雰囲気ではなかった。抗日戦争勃発以来、人々の意気は非常な高まりをみせていた。だが、戦局は期待とは反対に展開し、またたく間に首都の南京が陥落してしまい、人々が悲憤慷慨しているさなか、公然と移転について議論することなどだれにもできなかったのである。当時の世論は、臨大移転は百年の大計を慮ってのことではなく、軍隊の士気を低下させる「敗北主義」であるとみなし、臨大当局ばかりか教育部までその可否について決定をくだせなかった。[24]

こうした移転反対の声は、当時さかんであった戦時教育論争と相俟って、知識人はこの反侵略の抗日戦争のなかでどのような責任を負うべきなのかの議論にまでおよんだ。ちょうどこのころ、戦時教育を実施するか否か、いいかえれば戦時の教育は平時の教育と同じものなのか、それとも違うものなのか、教育をいかに改変し国難を救うべきかの問題についてはげしい議論がたたかわされていたのである。抗戦勃発以来、教育の面で最もはげしく議論されてきたのは、この問題についてであった。

一部の人々は、一切の正規教育を全面的に改め、戦時の非常教育を実施するよう主張した。かれらは高校および

大学の授業を停止し、学生および教員が兵役に服せるようすべきである。あるいは授業の完全停止まではおこなわないにせよ、小中高および大学の教育課程・教授法を改め、平時の正規教育を廃止し、戦争の必要に応じた非常時教育を実施すべきであると主張した。[25]

そこで臨大でも一部の学生たちが学校に戦時教育の実施を要求した。平時の教育はもはや戦時の必要には適応しない。学生は身をもって国に報いるために随時準備しているべきである。国家危急のときに、荘子や楚辞、シェイクスピアをもって前線にむかうことはできない。射撃練習や農村へおもむき宣伝工作をおこなうこと等をもふくめて平時とは異なった戦時教育を実施すべきだ、と学生たちは考えたのである。[26]

以上のような戦時教育論は、南京陥落の後とくに激しくなった。しかし、国民政府は教育にはほんらい戦時と平時の区別はない、「平時は戦時と見なし、戦時は平時と見なすべき」という方針のもとに、教育目標を抗戦支援と建国準備の二点においた。したがって、政府は従軍を希望する学生にたいする措置等、各種の臨時措置を講じはしたが、学校では正規の教育が維持され、教育・文化の大後方への移転がすすめられた。[27]

このような政府の方針にたいして、「生死の関頭（わかれめ）」すなわち重大な危機が差し迫り、湖南の民衆を動員し、指導しなければならないこのときに、遥かかなたの大後方へと移転していくのは、道義上、筋の通る話かどうか。移転の決定は、戦前の高等教育を継続していくことが、国家の防衛よりも優先されるということではないのか、といった反論が当然ながらでてくる。

しかし、そうしたはげしい論戦のさなか、学校当局は再度の移転の準備をすすめていた。一口に移転とはいっても、臨大の学生および教職員とその家族だけでも合わせて約二千人、それに大学の図書・機器設備を、再度にわたって、

しかも戦火のなかを移すのは並大抵のことではなかった。

雲南省昆明への移転が決まる前、広西省に移る話もあった。『南開大学校史』によれば、広西省政府主席黄紹竑が、南開大学校長張伯苓宛の手紙で、広西省に分校を設立してはどうかと建議してきたのだという。[28] そこで張伯苓は南開大学理学院長・化学系教授の楊石先（一八九六〜一九八五中——没年の下の「中」は中国の略称。以下、死亡した国を分明にするために、アメリカなら米、台湾なら台、香港なら港と略して記す）とともに南寧、桂林他へと視察に赴いた。しかし、安全であるということが何よりもまず重要な点ではあっても、広西ではあまりにも交通が不便だということで、この話は駄目になった——浦薛鳳の「結伴赴港」には、清華大学の梅貽琦校長と葉公超教授が桂林に赴いたと記す。[29] 聞一多は一二月一五日付妻宛の手紙に、学校の桂林移転の日取りは未定と記し、[30] 一二月二六日付両親宛の手紙には、桂林移転の話は、建物が足りないということで取りやめとなったと記していることから、だいたいこのころ桂林移転についての検討がなされていたことが知られる。

そしてこの後で、前線から遠くはなれ、しかも海港に通じた交通の便利なところがよいということで、雲南省昆明への移転が決まった。雲南なら滇越鉄路、滇緬路で国外にも通じており、図書・機器設備の運搬、補充も可能ということだったのである。滇越鉄路は、雲南省の昆明から仏領印度支那の海防（今のベトナムのハイフォン）にいたる国際鉄道であり、滇緬路とは昆明と英領緬甸（旧ビルマ）をむすぶ自動車道路のことである。

それでは、臨大の昆明への移転が決まったのはいつなのであろうか。聞一多は一月三日付両親宛の手紙に、臨大の昆明移転について議論がなされていることと、文学院が長沙にもどると決まったことを記している。しかし当時は世論が大きな圧力となって、臨大当局ばかりか教育部までが移転の決定をくだせなかったことについては先に記したと

おりである。そこで北京大学校長の蔣夢麟が蔣介石に会い、蔣介石みずからが臨大昆明移転を決定するというかたちをとり、ようやく決着がついたのであった。『国立西南聯合大学校史資料』には、一九三七年一月一九日に教育部と協議のうえ昆明移転を決定、一月二〇日第四三回常務委員会議において昆明移転を決議と記すが、浦薛鳳によれば、一月一一日には政府から昆明移転の許可をえていたという。

なお国民政府は一九三八年一月一日、行政院を戦時行政機構とするべく改組、行政院長は孔祥熙、教育部長は陳立夫、教育部政務次長は顧毓琇（字は一樵）、常務次長は張道藩、高等教育司司長は呉俊升。顧毓琇は清華大学工学院院長、呉俊升は北京大学教育学系教授、長沙臨大では南岳の文学院院務委員会主席で、いずれもこれを機に臨大を辞して、教育部弁公処のあった漢口に赴いた。また清華大学政治系教授の陳之邁は戦時教育委員会委員となっており、長沙臨大と教育部とはふかい関係にあったことがうかがえる。[31]

一四

臨大移転のニュースが伝わると、はたしてその反響はかんばしくないものばかりであった。

まず第一に移転に反対したのは湖南省政府主席の張治中であった。

『雲南師範大学校史稿』によれば、張治中は「移転はまったく必要のないものであり、長沙は絶対に安全である。臨大継続については湖南省政府も全力をつくしてこれを支持する。一歩ゆずって移転するにしても、はるばる昆明に

まで行く必要はない。湖南省内のどの県に移転してもよいわけである。さもなければ湖南省の人力、物力、財力についてはいかなる支持もいたしかねる」と言ったとつたえられている。[32]

張治中は湖南情勢の安定を望み、臨大の移転で長沙民衆が動揺することを極力さけようと、臨大が長沙に留まるようつよく求めたのであるが、[33]このことについては、以下のような資料もある。

宋廷琛の「記陳誠張治中在国立長沙臨時大学的演講」[34]によれば、昆明への移転にあたって何よりもまず必要となるのは交通手段である。そこで北大校長蔣夢麟と清華校長梅貽琦の二人が湖南省政府主席の張治中に会いにいき、移転のために車をまわしてもらえるように依頼した。ところが張治中は、いま戦況は緊迫し、軍事輸送でさえ追いつかないのに、どうして臨大移転になど車をまわせるものかとたいそう立腹し、一九三八年一月一二日にはみずから勇んで臨大にまで講演にやって来た。

そのかれは、登壇するやいなや「死ぬのが怖ければ雲南に行けばよい。絶対に車など出してはやらんぞ」と激しく罵倒した後、「湘江は数十万人を容るべし」とつづけた。その意味は、教授学生は屈原にならって湘江に身を投げ自殺せよというもので、話の筋もなにもなく罵るだけ罵るとカンカンに怒って去っていったというのである。

浦薛鳳の「結伴赴港」にも、たしかに臨大の移転計画が政府の許可をうけたその翌日、すなわち一月一二日の朝、張治中が臨大へ講演に来て、「湘江は十万人を容れて余りあるべし」と罵倒したと記されている。[35]

さらにこの移転については、急進的な学生たちがいっそう激しく反対した。かれらは壁新聞を貼出して、次のように主張した。

「学校は応に『国破れて山河在り』を知るべし、庸人　何ぞ必ずしも自ら之を擾さん、京津を離開せしより才めて　立足　方に定まり　正に弦歌を綴めざるを期するに、料らずも　又　搬遷を要すとは、既に学時を荒費するのみならず　又　民を労せしめ財を傷うものなり」

すなわち、学校は国都の南京が陥落したことを知らねばならない。そのような国家存亡のときに、なにを凡人が移転だなどと慌てふためいているのか。北平・天津から移転してきてようやく長沙に落ちつき、学業に励もうとしているところをそれも果たせず、はからずもまた移転だとは授業時間の浪費であるばかりか人力、物力の濫費である等々と非難をくわえたのである。

とうじ危機迫る長沙では容易に救国運動（中国語では「救亡工作」）に参加することができたため、その長沙から遥かかなたの昆明にまで臨大が移転していくのは、かれらにとって納得しがたいことなのであった。大学が移転してしまえば、救国と学業とはまったく別個のこととなり、「長沙にとどまるか、それとも雲南に行くか」という問題は、とりもなおさず「国を救うか、それとも学業に励むか」の二者択一を学生たちに迫ることとなったのである。教室から宿舎にいたるまで臨大のいたるところで、戦時教育に関する論争のときよりもさかんに議論がたたかわされた。そのうえ学生自治会は、長沙の有事に備えるためという理由で臨大の移転反対の請願をしに、漢口の教育部にまで代表を送り、それがまた当地の新聞の指示を得た。新聞もまた「大学生は逃避すべきではない」とさかんに書きたてたのであった。[36]

学生たちのこうした動きについては、清華大学校長梅貽琦が、もと清華大学工学院院長で一月一日より教育部政務次長として赴任していた顧毓琇に宛てた二月七日付手紙のなかで次のように述べている。[37]

――雲南移転に反対する学生の件については、少数の湖南を離れたがらない（その原因はかなり複雑である）学生たちの煽動によるものである。かれらは先月末、会を開こうとして果たせず、そのご三百数十人の署名を集めて、ついには学生会の名義で漢口当局に電報を打ち、今朝はまた代表二人を推挙し漢口に送ったと聞いた。

そしてこの後に、当時の臨大学生総数が南岳分校をも含めて千数十人にすぎず、このうち八割が雲南行きを希望している。雲南移転については、要するに改変の必要はなく、学生の請求にたいしては、教育部・臨大当局ともに断固としてこれにあたれば問題はない、とつづけている。当時の臨大学生総数が千数十人であったとして、そのうち移転反対に署名した学生数が三百数十人というのは、梅貽琦の記すように「少数」であったといえるのかどうかはさておくとしても、反対は実はかなりの数にのぼっていたと推測されるし、学校が騒然としていたのもまた事実であろう。

一九三八年の初めになると日本軍機の長沙空襲はさらに激しくなり、第一二章にも記したように帰郷したり従軍する学生がほとんど毎日のように学校から去っていった。そんなある日のこと、臨大では蔣夢麟校長の招請で陳誠将軍の講演がおこなわれた。このとき陳誠は対日抗戦の前途について分析したというが、清華大学土木工程系一一級（一九三九年卒業）の馮鍾豫は、陳誠は次のように語ったと記憶しているという。[38]

「対日作戦は長期戦となるが、政府は必ず勝つと確信している。そしてその後に待ちうけている国家建設こそが、いっそう長期におよぶ、いっそう困難かつ重要な大業なのである。わが国において高等教育を受けた人材は少数である。いま政府は抗日戦争のために青年が従軍することを必要としてはいるが、しかしその後の建国のために人才を養成することこそがいっそう必要とされているのである。臨時大学の学生諸君には、将来の任務のために備えられんことを、すなわち大後方に移って学問をつづけ、国内の統一をたすけ、いっそう重要な時機に国家の召集に応じられんことを希望する」

馮鍾豫によれば、陳誠のこの講演を聞いて、多くの学生たちが考えを変え、昆明へ向かうべく準備にかかったという。清華大学外国文学系一二級（一九四〇年卒業）の査良錚もまた、いつおこなわれたものか明記はされていないのだが、陳誠の講演について次のように記している――かれは学生たちに、このうえなく痛快に「目下の情勢」について分析すると同時に、青年の責任という問題について郭沫若や周恩来、陳独秀等の意見を引用して述べ、学校は移転すべきであるとの結論を出した。その後で多くの学生たちが雲南行きを希望するようになったのは、この陳誠将軍の影響が大きかったといわねばならない。

一方、西南聯大政治学系一九四〇年卒業の宋廷琛は、上海から中国軍が撤退し、南京にも危機が迫っていた一九三七年一二月初めに、陳誠将軍が来校し講演したと記している。[39]

宋廷琛によれば、登壇したかれの眼は炯炯とかがやき、謙虚な態度で幾度となくみずからを「敗軍の将」と称し、学生たちは好感をもった。陳誠は上海での戦局について詳細に分析し、「現在、一時的に敗れはしたが、しかし、

われわれは空間と時間とによって日本の戦力を消耗させる。徹底抗戦というわれわれの決心を変えることは絶対にありえないのである」と語った。

陳誠の講演が一九三七年一二月初めと、翌三八年の一月か二月の少なくとも二度おこなわれたのかどうか、それともかれの講演は一度で、馮鍾豫と宋廷琛の記憶が食い違っているだけなのか、たしかなことは分からない。しかし、この陳誠の講演がまさに当時の国民政府の見解を如実に示しているのである。

当時の中国における大学生の数は国民一万人に一人しかいなかった。すなわち高等教育を受けた人材があまりにも少なすぎるのにたいし、人口は多く、兵士の補充も不足することなく充分に徴兵することができた。そこで抗戦長期化の見通しのもとに知識青年を将来における建国の幹部として養成するため、暫時徴兵免除とし、これまでの教育を維持発展させて行くとともに、戦争の必要に応じた種々の臨時措置がとられたのであった。(40)

教授たちも大多数が政府の見解と同じようにわれわれは研究につとめ将来の建国のときに備えるべきであり、学生が訓練を受けても兵隊に勝るわけがないと考えていた。当時、中国軍はたしかになかなかよく戦っていたのである。(41)

臨大で講演した陳誠（一八九八～一九六五台）と張治中（一八九〇～一九六九中）は、いずれも先の淞滬戦役における勇将であった。中国側は上海方面を主作戦と考えて主力を集中し、華北方面では退避作戦を行った。そこで淞滬戦役では蔣介石みずからが指揮をとり、蔣介石直系の精鋭部隊を投入、中国軍は頑強に抵抗し、戦線が膠着して損害が多発したことは第一一章に記したとおりである――それでも中国軍が総退却をおこなうにいたったのは、日本側が制空・制海権をにぎっていたからであった。このとき陳誠将軍は、第三戦区前敵総指揮兼第十五集団軍総司令、そのご武漢衛戍総司令兼湖北省政府主席。第三戦区の作戦区域は蘇南（長江以南）と浙江。張治中将軍は、淞滬警備司令

兼第九集団軍総司令で、一九三七年一一月二〇日から湖南省政府主席。宋廷琛によれば、陳誠が臨大へ講演にきたのは、上海から撤退の後、健康がすぐれずちょうど長沙で休養していたときのことなのだという。

それでは今日、大陸中国では、当時の学生たちの戦時教育実施の要求や従軍運動、移転反対といった一連の動きおよび国民政府の方針についてどう評価しているのか。

『清華大学校史稿』では次のように記述している。[42] すなわち、学生たちは抗戦に呼応して戦時教育実施の要求を出していた。けれども、少なからぬ教授たちは抗戦勝利の希望をすべて国民党に託し、「上には英明な領袖（蒋介石）がおり、下には五百万の勇猛果敢な抗戦将兵がいる」[43]と考え、政治からは遠ざかっていった。

若干の学生たちは街頭宣伝や軍の慰労といった抗日活動に参加し、雑誌『火戦下』を出版して、湖南の青年に抗日救亡の革命の種子をまきひろめた。若干の学生たちはさらにそのうえ従軍運動をおこし、八路軍駐湘弁事処代表の徐特立が臨大で講演したのも学生の招請によるものなのであった。そしてこの講演で徐特立が延安および八路軍の抗日状況を紹介したことが学生たちをたいそう鼓舞し、その結果、若干の進歩的な学生が国民党の封鎖を突破し八路軍に参加したり、延安の抗大に入学したりすることになったのだと位置づけている――ただしこの徐特立の講演については、「民衆を動員し、参軍参戦しよう」と呼びかけただけではなく、かれは卓をたたいて声を長くひっぱり「臨大が再度南遷をはかるとは、当局は『唯心派』なのだ」と激しく糾弾した、との資料もある。[44]

そこで教育部は臨大当局宛に、血気盛んな青年たちが煽動惑乱されるのを防止するため、学外人士が来校し講演することを全面的に禁止するように、との密電[45]を出した。陳誠も急いで臨大へ講演にいき、学生は「民族の最後の一滴

の血」であると説き、「蠢動」することなく「落ち着いて学問に励む」よう勧めた。それと同時に、国民党側の単位が学生を募集あるいは徴用してしまったのだとする。[46]

しかし、先の密電は一九三八年二月一四日付ということであり、湘黔滇旅行団の長沙出発が二月一九日であることから、「煽動惑乱の防止」の見地から出されたとすれば遅きに失したとは考えられないだろうか。あるいは学生たちの動揺がそれだけ激しく、出発間際まで雲南に行くかどうか未定のものが多かったのであろうか。馮鍾豫も、学生たちは陳誠の講演を聞いて考えを変え、昆明へ向かうべく準備にかかったと記していたことから、陳誠の講演もこの密電が出されたころ急遽おこなわれたものだったのかもしれない。

その他に、『北京大学校史』では、臨大開設のころは教授たちも、このような戦争が始まった以上は全国的に動員をかけるべきであり、少なくとも兵士または民衆の教育にあたっていささかなりとも力を尽くそうと政府の指示を待っていた。[47] また少なからぬ学生たちは、身をもって国に報いるために随時準備すべく戦時教育の実施を要求した。しかし、国民党政府は、人民大衆が抗戦の過程で広汎な動員をうけることを恐れ、こうした希望はすべてかなえられることはなかった。教授たちは過去に教えた書物をまた教えはじめ、学校教育は改変されることなく平時のままであった。そこで戦時教育実施の要求が実現されなかったがために、多くの学生たちはみずから前線へと赴いたのだとする。[48]

しかしながらこの戦時教育論争については、当局側が学外人士が来校し講演することを全面的に禁止するようなことはあったにしても、聞一多がいうように「両派はそれぞれみずからが是と考える方にすすみ、戦争に参加しようと思うものは前線に赴き、それを望まないものはそのまま学校にとどまり学業をつづけた」というのが本当のところではあるまいか。

聞一多は「八年的回憶與感想」のなかでさらに次のようにつづけている。[49]

――ここで注意すべきは、全ての学生が戦時教育を主張し、すべての教授が平時教育を主張したのではないということである。先にも述べたように教授たちも徴用されるのを待っていたのである。徴用されなかったため、安心して講義をまた始めたのであった。南京や武昌に行って政府に身を投じたものもあったが、いずれも落胆してもどってきた。学校内においてもカリキュラムのなかに抗戦に呼応したものを組むことに積極的に反対したわけではなかった。しかし教育部からは明確な指示は出されなかったし、またこれまで学校教育というものは現実生活とは関わりがなく、さあ、砲声が轟いた、ただちに教育を現実に呼応させようといっても、何から着手すればよいか分からなかったのである。

そして、このとき前線に赴いた学生たちのうちのかなりが、そのご昆明の西南聯大に復学し卒業したことは、先にも記したとおりである。[50] 査良錚もまた「救亡工作に参加していた学生の多くが西南聯大に復学してきた」と記している。[51] もっとも、かれらが大学から去っていった当初、やがて復学し卒業することなど夢にも考えてはいなかったのであるが。

ここで、長沙臨大に到着できないでいるうちに陝西省西安で従軍運動に参加、そのご昆明の西南聯大に復学した靳廣濂の回想録[52]を見ておこう。靳廣濂は、清華大学歴史学系一九三五年入学、本来は一九三九年卒業のところ、一九四三年卒業。

かれの場合は、軍事訓練を終えて汽車で天津まで出たところ、駅で日本軍に逮捕されてしまった。憲兵の取り調べまで受けたのだが、学生であることを見破られることなく難を逃れ、その後、転々としながらようやく西安にたどり着いた。ちょうどそのとき学生の従軍運動がさかんになっており、また西安には新たに成立した軍事機関が林立し、多くの人員を必要としていたため、学校をやめて、当地の軍事機関に参加したのであった。

かれもまた西安で、空襲にあい、危うく命を落としかけたことを記しているが、蘭州空襲のため五日連続して西安北郊を日本軍機が飛んで行くこともあったという。

そのかれも日がたつにつれて、軍事機関での決まりきった仕事に嫌気がさし、だんだんと南下して復学したいと思うようになってきた。ちょうど抗戦中期のころで、物価は上昇し始めたにもかかわず、軍中での給料は微々たるものであったため、一年あまりも衣食を節約してやっとのことで旅費を貯め、一九四一年七月に出発することができた。昆明には九月に到着の予定であったが、交通の便が極端に悪くて遅れ、十月中旬になってしまった。新学期が始まってから一カ月あまりもたっていたのだが、特例でなんとか復学が許可された。

注

(1) 湖南省志編纂委員会編『湖南省志・第一巻・湖南近百年大事紀述』第二次修訂本（湖南人民出版社、一九七九年）、七五〇頁。

(2) 蔡孝敏（清華経済学系一九三九年卒業）、「臨大聯大旧人旧事」、『清華校友通訊』新六五期（一九七八年一一月）所収、八頁。但し、蔡孝敏によれば、その翌日の新聞には二機の日本軍爆撃機が各四個の爆弾をもって長沙を空襲とあり、『湖南近百年大事紀述』の敵機四機が爆弾六個を投下の記述とは異なっている。

(3) 楊歩偉『雑記趙家』（伝記文学出版社、一九八五年）、一〇八頁。趙元任については、本稿第一章注（4）を参照。

(4) 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書・支那事変陸軍作戦〈一〉』（朝雲新聞社、昭和五〇年）、三八七頁。同書によれば、八月の出兵から一一月八日までの上海方面における戦死傷者の累計は、「戦死九、一一五名、戦傷三一、二五七名、計四〇、六七二名」と記す。

(5) 陳之中、譚剣峰編『抗日戦争紀事』（解放軍出版社、一九九〇年）、二八頁。但し、陳旭麓、李華興主編『中華民国史辞典』（上海人民出版社、一九九一年）、四四七頁には、淞滬戦役に日本は陸海空軍あわせて三〇万人を投入と記す。

(6) 『中国抗戦画史』、第三章抗戦第一期（上）による。但し、陥落の日付は日中両国間や諸本によって異同があり、例えば『抗日戦争紀事』には、日本軍が嘉興、常熟、蘇州を占領したのは一一月一九日とある。また、日本軍の太原占領が一一月八日というのは、『戦史叢書・支那事変陸軍作戦〈一〉』、付表第一「暦日表」により、『中国抗戦画史』所収の「抗戦大事記」四四五頁には一一月一二日上海・太原から中国軍撤退とある。以下、本文中に記す陥落の日付は、特に出所を明記しない場合、すべて『中国抗戦画史』による。

(7) 中国人民抗日軍事政治大学（略称は抗日軍政大学・抗大）は抗日戦争中、中国共産党が幹部養成のために設けた学校。一九三六年六月一日陝西省の瓦窰堡で「中国抗日紅軍大学」として創設、一九三七年一月中国人民抗日軍事政治大学と改称、延安に移った。この大学の教育委員会主席は毛沢東、校長兼政治委員は林彪。毛沢東みずからが「正しく揺るぎのない政治目標、困難にたえ質素を旨とする作風、機動性にとむ戦略・戦術」を教育方針とし、「団結・緊張・厳粛・活発」

を校風とすることを定めた。学生はおもに部隊の幹部であったが、全国各地から陝北にやってきた知識青年もうけいれた。学習内容はマルクス・レーニン主義の基礎知識、抗日民族統一戦線、遊撃戦、中国歴史等。八年間の抗日戦争中、抗大は一二の分校を開設、あわせて二〇余万人の軍事政治面における幹部を養成し、革命幹部学校の模範となった。

(8) 『雲南師範大学校史稿』、九頁。

(9) 南開大学校史編写組『南開大学校史（一九一九――一九四九）』（南開大学出版社、一九八九年）、二四〇頁。

(10) このいわゆる南京大虐殺の犠牲者数は、『抗日戦争紀事』三一頁、翁玉栄主編『中国革命史図集』（吉林美術出版社、一九八九年）二一〇頁にはいずれも「三〇万人」と記す。

(11) 『国立西南聯合大学校史資料』、八頁。なお、同月二九日、国防服務紹介委員会および国防技術紹介委員会の両委員会は統一され、国防工作紹介委員会となった。

(12) 武漢および湖南省における当時の中国共産党の動きについては、おもに以下の資料による。中共湖南省党史委編『湖南人民革命史』（湖南出版社、一九九一年）、四六九～四七六頁、四七八～四八七頁。本書によれば、長沙臨大の共産党員は二〇余人という。『北京大学校史』、三四五頁。長沙臨大共産党支部における党員数一〇余名は本書による。中共湖南省委党史資料徴集研究委員会主編『湖南党史大事年表』（湖南人民出版社、一九八六年）、一一七～一二三頁。『湖南省史・第一巻・湖南近百年大事紀述』、七三一～七三四頁。中共中央文献研究室編『周恩来年譜』（中央文献出版社・人民出版社、一九八九年）、三九三～三九八頁。本書には、周恩来、王明、博古らの武漢到着は一九三七年一二月一八日と記す。懐恩『周総理生平大事記』（四川人民出版社、一九八六年）、一九三～一九五頁。

(13) 『清華大学校史稿』、三九〇頁、三九一頁。なお、同書二九二頁には、国民党陸軍交通輜重学校に入学させられた清華大学工学院の学生は「二八人」と記す。

(14) 『南開大学校史』、二四〇頁。一九三七年一一月二〇日の時点で、南開大学から長沙臨大に入った学生数は一四七人（本稿第四章参照）、これに南開大附中から入学した新入生の数も含めるのかどうか不明であるが、そのうちの約七〇余人が学校から去っていったことになる。

同書によれば、この約七〇余人の内訳は、武漢救亡総会訓練班（五人）、湖南国民訓練班（一七人）、湖南戦地服務団（一三人）、

空軍学校（二二人）、軍政部学兵隊（七人）、軍事工程（四人）、第一三軍・第一四軍・第一八一師（五人）。この他に臨汾、西安、鄭州、開封等に行った学生も若干名あり、その後、戦死した学生もあったという。

(15) 一〇級とは当時四年生で、一九三四年に入学し、一九三八年に卒業予定の学年のこと。卒業生名簿には卒業年度を採用し、一九三八級と記される。したがって一一級とは当時の三年生をいう。

(16) 張去疑「畢業五十年的回顧」、『清華校友通訊』新一〇三期（一九八八年四月）所収、三六頁、三七頁。張去疑は、台湾清華大学動力機械系元教授。かれは重慶で五カ月間訓練をうけたが、病気のため昆明に行って休養、その後、復学して一九三九年卒業。

張去疑は空軍の電訊方面に進んだ学生六人の名を挙げているが、そのうち『清華校友通訊』卒業生名簿で見つけることができたのは以下の三人である――姚伝澄も後に復学、一九四一年に卒業。沈在松は一九三三年清華に入学、本来は一九三七年に卒業のはずがなおも在学中で従軍、その後、復学して一九四四年卒業。もう一人の汪復強は卒業はしておらず、一九三八級肄業となっている。

(17) 陳乃能「歳月催人老　且共話当年」、『清華校友通訊』新一〇三期所収、四四頁。陳乃能はその後も軍隊にとどまり卒業はしておらず、『清華校友通訊』卒業生名簿には一九三八級肄業となっている。

同文中に、かれとともに金井陸軍機械化学校に赴いた学生一一人の名を挙げているが、そのうち同名簿で見つけることができたのは以下の六人、いずれも機械工程学系の学生で、その後、復学して卒業している――一〇級では梁伯龍と郁興民が一九三九年に、楊徳増と胡篤諒は一九四〇年に卒業。一一級では呉仲華と孟慶基が一九四〇年に卒業。

(18) 張卜庥「逃兵的話」、『清華校友通訊』新六七期（一九七九年四月）所収、五八頁。かれはその後、聯大に復学しようとするが交通が遮断されて昆明まで行けず、やむなく陝西省の西北大学で学び（原文は「借読」、西南聯大の委託学生として西北大学で科目を履修すること）、一九四一年卒業。

『清華校友通訊』卒業生名簿によれば、張卜庥は河南省修武の人、清華大学中国文学系で二年半学んだ後（原文は「肄業」）、西北大学で学んで卒業とあり、一九三八級肄業となっている。

(19) 林徴祁（一九一七～一九九〇台）は福建省林森市の生まれ、林則徐の五代目の子孫。そのご軍令部第二廳第三処参謀、

抗日戦争中は軍籍にとどまり復学はしていない。林徴祁によれば、一九三五年清華大学に入学し、二年間学んだ後、長沙臨大で一学期間学んで従軍、正式には卒業していないというが、『清華校友通訊』卒業生名簿には「西南聯大・北大・南開一九三九級者」として収録されている（専攻未詳）。林徴祁「掛單的清華人」、『清華校友通訊』新六七期所収、六〇頁。「林徴祁先生事略」、『清華校友通訊』新一一二期（一九九〇年七月）、九〇頁。

「林徴祁先生事略」によれば、清華大学第一一級の一九三九年卒業生のうち、一九九〇年における台湾居住者は約二〇人、米国・香港居住者は二六人――先の卒業生名簿によれば、清華大学第一一級の一九三九年卒業生は一五六人。なお、林徴祁夫妻には一人娘があったが、大陸と台湾に離れ離れになってしまい、林徴祁の亡くなる前月ようやく四〇余年ぶりの束の間の再会が果たせたばかりなのだという。

(20) 周應霖「四十年体験多」、『清華校友通訊』新六七期所収、八五頁、八六頁。

(21) 李芳蘭「清華園参観記」、『清華校友通訊』新六四期（一九七八年七月）所収、一六頁。洪同（原名は洪綏曾）「匆々一瞬又十年」、『清華校友通訊』新六三期（一九七八年四月）所収、六九頁。洪同「在這三千六百五十個日子裏」、『清華校友通訊』新一〇三期所収、五八頁。なお洪同は一九八五年満七〇歳で退職、その後も毎年「兼任教授」として招かれ、一九八八年の時点においても、台湾清華大学に宿舎と研究室とをもち、一週間に四時間の授業と『交友通訊』の事務を担当している。

(22) 浦薛鳳、前掲文。なお鄭之蕃（字は桐蓀）は、『国立西南聯合大学校史資料』所収の西南聯大教職員名録に理学院算学系教授として収録されているため、その後、昆明には行っている。

(23) 郁振鏞、前掲文。

(24) 張起鈞「西南聯大紀要」、『学府紀聞　国立西南聯合大学』（南京出版有限公司、一九八一年）所収、三三頁。『雲南師範大学校史稿』、九頁。

(25) 教育部部長陳立夫「戦時教育方針」（民国二八年一〇月）、『中華民国重要史料初編――対日抗戦時期・第四編・戦時建設（四）』（中国国民党中央委員会党史委員会編集出版、一九八九年）所収、四八頁。Ou Tsuin-chen, "Education in Wartime China," in Paul K. T. Sih ed., *Nationalist China During the Sino-Japanese War, 1937-1945*

(New York, Exposition Press, 1977), p.96. 同書の中国語訳は呉俊升「戦時中国教育」、薛光前編著『八年対日抗戦中之国民政府（一九三七年至一九四五年）』（台湾商務印書館、一九七八年）所収。

(26) 「我們的道路（代序）」（作者名は明記されていない）、聞一多「八年的回憶與感想」、『抗戦中的西南聯合大学』所収、一頁、四頁。

(27) Ou Tsuin-chen、前掲書、九〇頁、九七頁。国民政府交議：「戦時各級教育実施法案」（民国二七年七月一四日国民参政会第一届第一次大会第九次会議提案）、『中華民国重要史料初編――対日抗戦時期・第四編・戦時建設（四）』所収、二八頁。呉俊升「自訂年表初稿」、呉俊升『庚午存稿』（一九九一年、台湾商務印書館）所収、一三〇～一三三頁。

なお、陳立夫、呉俊升の前掲文には、蔣介石は一九三九年三月に開かれた第三回全国教育会議における訓話のなかで、「教育は『常軌』に循うべきであり、戦時と平時を区別してはならない。この常軌とは『平時は戦時と見なし、戦時は平時と見なすべき』ということである」と指示したという。

(28) 『南開大学校史』、二四一頁。

(29) 浦薛鳳、『太虚空裏一遊塵・八年抗戦生涯随筆』（台湾商務印書館、一九七九年）所収、五九頁。

(30) 聞一多は同日付妻宛の手紙に、桂林に行けば送金にも時間がもっとかかるようになり、またいつでも送金できるとは限らないので節約するよう求めている。

(31) 顧毓琇は教育部に移るさい、学生時代からの友人でもあった聞一多に教育部での仕事を手伝ってくれるようにと依頼しているが、聞一多は一月二六日付の手紙で断わっている。その手紙は以下の通りである。

「嘱を承くる事、盛意感ずべし。惟だ是弟の知る所、僅かに国学中の某一部分にして、茲の事　体大にして、万に任に勝え難し。且つ累年蓄うる所の著述の志、早日に実現するを得ざるを恨む。近ごろ甫めて機会を得しも、恐らくは稍も縦せば即ち逝き、將に半生の勤労をして、一として成す所無からしめんとするは、亦惜しむべきなり。老友中に惟だ我輩数人、自棄するに甘んぜず、時に事業を以て相砥礪す。弟個人　兄の鼓励を得ること尤も多く、毎に用て自ら慶ぶ。但し我輩の事を作すは、亦必ずしも聚まりて一処に在るべからず、苟くも各自努力し、方向を認め清らかにし、邁進して已まざれば、要当に殊塗同帰すべきなり」（顧一樵「懐故友聞一多先生」、『文芸復興』第三巻第五期、一九四七年七月一日出版所収、五三五頁）。

(32) 『雲南師範大学校史稿』、一〇頁。
(33) 『南開大学校史』、二四一頁。
(34) 宋廷琛「記陳誠張治中在国立長沙臨時大学的演講」、『清華校友通訊』新九二期（一九八五年七月）所収、六七頁。宋廷琛は、西南聯大政治学系一九四〇年卒業。本稿第一四章五〇頁参照。
(35) 浦薛鳳、前掲書、五八頁、五九頁。
なお、郁振鐘によれば一番最初に臨大へ講演にきたのは張治中だとあり、あるいはかれは臨大で二度講演をしたのかもしれない。本稿第七章一八頁および注（5）参照。
(36) 『雲南師範大学校史稿』、一〇頁。『南開大学校史』、二四一頁。John Israel, "Southwest Associated University: Preservation as an Ultimate Value," Paul K. T. Sih 主編前掲書所収、一三六頁。査良錚「抗戦以来的西南聯大」、『教育雑誌』第三一巻第一号、抗戦以来的高等教育専号（一九四一年一月一〇日）所収、一頁。以下、査良錚の回想はすべて「抗戦以来的西南聯大」による。
なお、『雲南師範大学校史稿』所収の壁新聞「庸人何ぞ必ずしも自ら之を擾さん」の原文は「庸人何必自忧之」。「忧（憂）」は「扰（擾）」の誤植と考え、本稿の通り訳出した。
(37) 「西南聯大建校書簡」、『清華校友通訊』新一〇五期（一九八八年一〇月）所収、四頁。
(38) 馮鍾豫「四十年来」、『清華校友通訊』新六七期（一九七九年四月）所収、六四頁。但し、同誌目次では「四十年後」となっている。
(39) 宋廷琛、前掲文、六七頁。
(40) Ou Tsuin-chen、前掲書、九六頁、九七頁、一一九頁。
(41) 聞一多「八年的回憶與感想」、前掲書五頁。
(42) 『清華大学校史稿』、三九〇頁。
(43) 聞一多「八年的回憶與感想」、前掲書五頁。
(44) 季鎮淮「聞一多先生事略」、『聞一多紀念文集』（生活・読書・新知三聯書店、一九八〇年）所収、四六一頁。本稿第七

章一九頁、第一二章三五頁参照。

(45) 聯大档案《部令（密）》巻、一九三八年二月一四日教育部の臨大宛密電、『清華大学校史稿』所収、三九〇頁。

(46) 本稿第一二章三七頁参照。

(47) 本稿第八章二〇頁参照。

(48) 『北京大学校史』三二七頁、三二八頁。

(49) 聞一多「八年的回憶與感想」、前掲書五頁。

(50) 本稿第一二章三八頁、三九頁、注(16)～(19)参照。

(51) 査良錚、前掲文、二頁。

(52) 靳廣濂「畢業五十年瑣憶」、『清華校友通訊』新一〇七期（一九八九年四月）所収、一一五頁、一一六頁。

〔本稿は一九九一年度同志社大学学術奨励研究費による研究成果の一部である〕